幼児の教育 第93巻 第12号 平成6年12月1日 (毎月1回1日発行) 昭和23年4月15日第三種郵便物認可 ISSN0289-0836

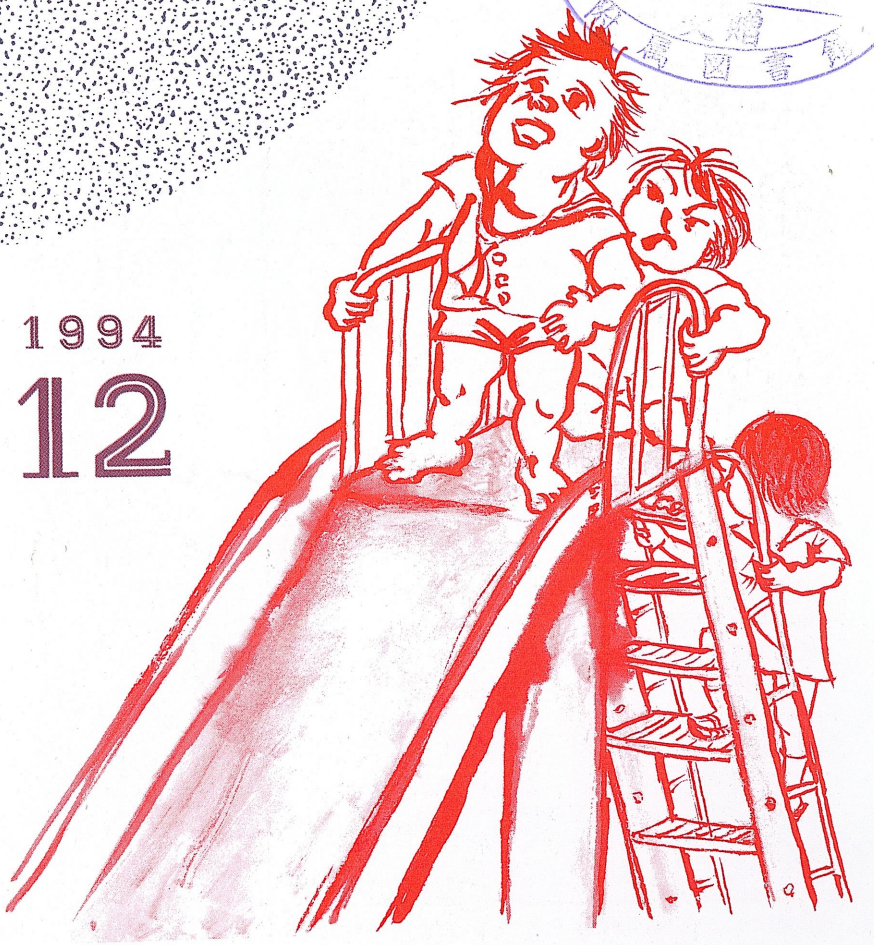
家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

お茶の水女子大学 平成 6.11.11 図書館

1994

12



第93巻　第12号　日本幼稚園協会

リズム保育12か月

―手あそび・ゲーム・オペレッタ―

鈴木みゆき 編著

保育をパワーアップ
行事からオペレッタまで
CD5巻に総編集

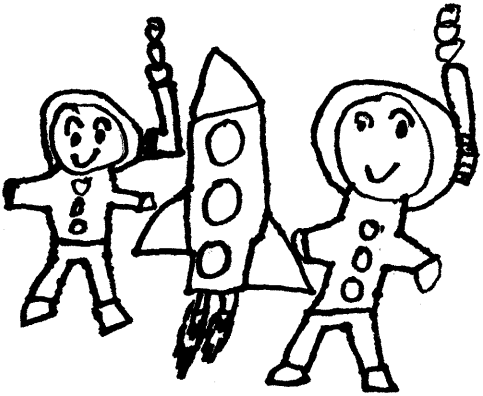
■CD５巻セット（解説書付）　セット定価12,500円（本体12,136円）
■解説書（B５判 216頁）　定価 2,500円（本体 2,427円）

- 日常保育、行事にすぐ活用できる画期的リズム保育資料
- CD５巻と解説書（１巻）をセット。解説書には日々の保育を演出する際のヒントとアイデアを４月から月ごとに月案、日案、楽譜、活動例で構成。
- 行事に役立つあそびやゲーム、オペレッタには、楽譜はもちろん振りつけを分かりやすく図解。初心者からベテランまですべての保育者を対象。
- CDの音源はすべて音楽性豊かなフルオーケストラを使用。
- CD５巻は年間のすべての保育に役立つよう104曲を厳選。
- 誰でも知っている曲、新しく発表した曲、新曲のオペレッタ（お話はよく知られた童話）など盛りだくさんの内容。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第93巻　第12号

幼児の教育

目次

——第九十三巻　第十二号——

〈巻頭言〉保育の「ビデオ観察」雑感……佐伯　胖…（4）

家族……津守　真…（8）

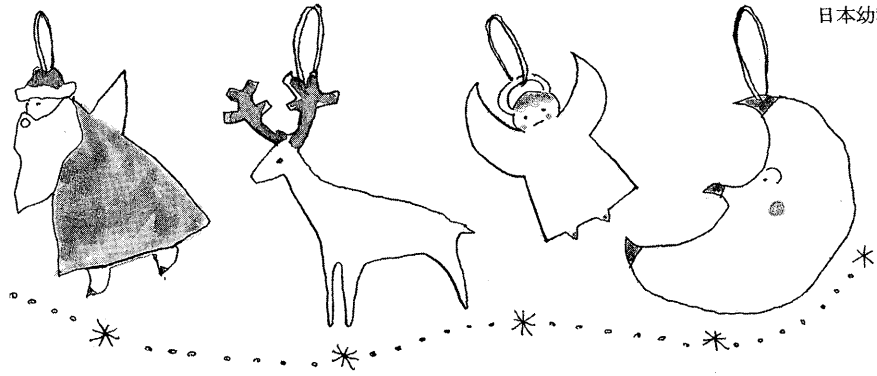
あそびの研究(3)　韓国における十八世紀の子どもの遊び……朴　香俄…（16）

お正月さんがやってくる(1)……はる・みつ…（26）

幼児の言葉の記録　「聞いちゃった！」の実践より……国広　勝代…（30）

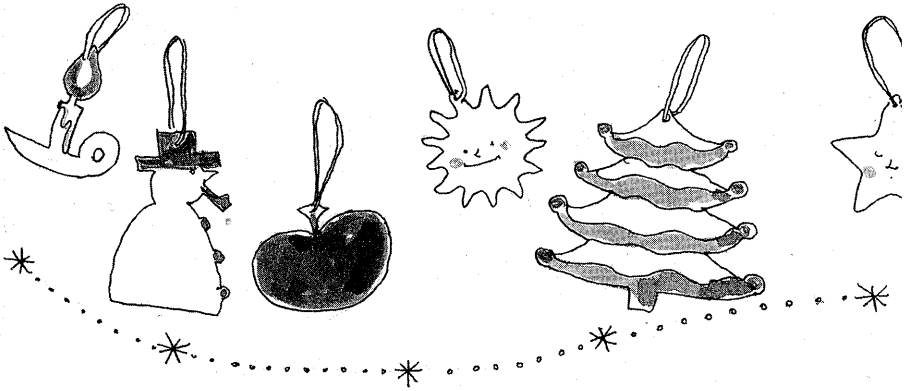
充実した時間……田中都慈子…（38）

© 1994
日本幼稚園協会



家庭科教育の男女共修をむかえて(4)
中学生の保育体験学習に学ぶ……佐野　幸子…(41)
子どもたちへのまなざし(10)　ふれあい……松井　とし…(50)
黄遵憲がとらえた明治の子ども(1)……首藤美香子…(52)
ある日の育児日記から(48)……佐藤　和代…(60)
幼児の教育　第九十三巻　総目録……(61)

表紙・梅田　なほ／扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／田代　和美
桝田　正子・田中三保子
編集部・大沢　啓子



〈巻頭言〉

保育の「ビデオ観察」雑感

佐伯　胖

最近、ビデオによる保育園や幼稚園の幼児の行動観察がさかんになってきた。このこと自体は大いに結構なことなのだが、どんな方法にもそれなりの制約と限界があるので、注意を要する。

まず第一に、観察の「切り取り」効果である。保育者にしろ、園児にしろ、常に過去から現在、未来への「流れ」の中に生きている。なにげない動作が、数時間前、あるいは数日前、あるいは数年前の「あのこと」との関連で意味づけられていたり、あるいは、「あとであれをしよう」という心づもりのもとでの、ほんの暫

定的な措置であったりする。それがビデオで一つのシーンとして「切り取られ」た場合に、そこの映し出されたことがらだけから判断がくだされると、実はまるで見当違いだということもある。

第二は、いわゆる「観察」効果である。つまり、その場で、特定の「観察者」がビデオカメラをたずさえて、そこでカメラを子どもに、保育者に、あるいはその周辺に向けて、「カメラを向けている」という事実にもとづく影響である。「観察されている」というだけで、人の行動はありのままではなくなる。「ビデオに撮られ、記録される」ことの影響も、場合によっては決して無視できないほど大きい。したがって、ビデオ記録の場合には、ビデオ記録を撮る人は、撮られる人とはまったく無縁の、「あかの他人」であることがのぞましい。

また、撮られているシーンというのは、その観察者のそのときにおける興味、関心、あるいは「なにかがありそうだ」という直感の産物であって、観察者の価値観や思想と無縁ではない。したがって、撮影する人の価値観や思想というのはつねに考慮しておき、映像を解釈する際に念頭に置いておくことが必要である。

第三は、「サンプリング効果」である。つまり、特殊な、まったく偶然のできごとが、あたかも典型的な出来事のように扱われたり、逆に、きわめて頻繁に起こっている出来事がたまたま、あっさりと、偶然的なことのように扱われてしまう、ということである。

こういう問題はいろいろあるが、やはり映像というのはとてつもない情報量をもっていることも事実である。わずかな目の動き、からだの動きから、本人の無意識のうちに働いている

「何か」が鮮明に映し出されている場合もある。また、ふだんの保育活動のなかではとても目が行き届かないさまざまなことがらの相互関係が、ビデオで見てはじめて歴然と見えてくることもある。そして何よりも、保育者が、「自分を見る」ことの重要性を強調しておきたい。保育活動の現場では、ついつい「あの子」を見たり、「あのこと」に気を配ったりしているが、そういう「自分」が、子どもにとってどう見えているのかを、「子どもになったつもりで」見るということは、是非とも実践していただきたい。

さて、ビデオ記録を撮影する際に、是非とも注意していただきたいことがある。それは、撮影者は、できるかぎり「フィールドノート」をきちんとつける、ということである。とくに、子どもがあのとき何を言っていたのか、どの子どもがどの子どもに何をやっていたのか、などなどは、あとでビデオを見ただけではわからないことが結構多い。そのために何でもそのとき気づいたことはどんどんノートに記載しておくことである（ノートはその場で書く場合もあるが、その日のうちにビデオ再生しながら想起しつつ書きとめてもよい）。

また、ビデオ記録にあたっては、つねに「関係」を記録するように努めてほしい。特定の子どもに焦点を当てて「その子どもが何をするか」を詳細に記録するというよりも、「その子どもの行動に関係している他者、他の出来事」を記録する、という心づもりで記録してほしい。とくに、他の園児とかかわり、あるいは特定の「集団」とのかかわり、などなどである。したがって、近距離で「表情がわかる」ようにクローズアップで撮るばかりではなく、遠くか

ら、周囲の状況を視野に入れて撮ることもきわめて重要である。

もう一つは、極力「一部始終」を記録する、ということである。やたらにあれこれのシーンを断片的に記録するのではなく、コレと思ったところでは、カメラを動かさずに、じっくり撮り続けるということである（幼稚園などでのできごとの「一部始終」というのは、案外長い時間を意味していることがあるので注意）。

なにしろコトが起こってからでは遅い。何かが起こりそうだという直感が働いたら、むだになってもよいから、どっしりとカメラを据えて、あとは何事が起こっても（文字どおりの「危険」な事態が発生しないかぎりは）ただ平然とテープを回し続けることである。よくある「けんか」や小さな「事故」（モノを落としたとか、壊したとか）ぐらいで動揺してはならない。あくまで無干渉で、子どもたち自身でどう対処するかの一部始終をしっかり撮り続けるのは、かなりの「自制」の努力が必要だろう。しかし、そういう場合の記録こそが貴重な記録になり、冷静で落ちついた目で保育を見ることを支援してくれるのである。

（東京大学教育学部）

家族

津守　真

この夏、私は、ＯＭＥＰ世界理事会に出席するために、英国ウオーウイック大学に行った。ロンドンからバスで二時間ほどの北西の町、コヴェントリーにある。大学は広い緑の中にあり、夜は毛布をかける程の涼しさで、暑さが絶える間がなかった今年の日本の夏とは大きな違いだった。来年横浜で開催される世界大会の報告をし、まだ決まっていない幾つかのことを相談するという重要な任務があったので、私は一週間を緊張のうちに過ごした。忙しい日程の中で、いくつも考えさせられることがあった。ひとつのことでも、日本から見たときと、南米あるいはアフリカから見たとき、米国から見たときと、見方に大きな違いがあることが分かって勉強になった。

世界理事会の冒頭、世界のＯＭＥＰ副総裁である、ブラジルのヴィタール・テイドネーがひとつの詩を読んだ。子どもが大人に差し出した手紙の形をとっている。印象深かったので、次にその一部を訳して紹介したい。

「国際家族年はわれわれ子どもたちにとって、何を意味するか
―たしかに多くの希望がある―

家族は、私たちにとって、優しさと慈しみ、愛と尊敬のもと
もしも家族がなかったら、私たちは目標も方向もなく迷う
大人たちが、もしも月の砂漠にひとり取り残されたらと想像しよう
あなたが叫んでも、だれも聞いてくれない
慰めや助けを求めても、手を伸ばしてくれる人はいない
（中略）
六歳、七歳の子どもが仕事のために学校をやめねばならない
玩具を道具に、ボールを靴磨箱に、人形を掃除モップと水桶にかえる
それでも世界に正義はあるのか

多くの親たちは、精神や身体の発達に欠陥のある息子や娘をどのように育てたらよいか

を知らない
障害のある子どもをもつことになった事実をすら受け入れない
最初は
この特殊な子どもたちを、他人は憐れみと軽蔑の目で見る
こんな子どもたちが生まれたのは、親が何か悪いことをしたからだろうと考える
親たちは自問自答する　われわれのどちらが悪かったのか
そして神にたずねる　なぜ　私たちにこんな重荷をと
後には
この子は、特別な必要をもっているから、夜も昼も、そしてしばしば一生涯にわたって
私は、多くの時間と、多くの労力を献げようと
そして終に
この子は障害児なのではない　われわれに挑戦している子どもなのだ
この子の特別な必要に答えるのには　私たちは学びつづけねばならないと
知るようになる

だれが、親たちに、この子を教育し、その発達を助ける仕方を教えるのか
この子たちを、荒涼とした部屋の折り畳み式ベッドの上に捨てるのをやめるように
だれが教えるのか

耳が聞こえず、口のきけない子どもを育てる親たちを
この子たちが考え、想像し、コミュニケートし、そのほか多くのことをするようになる、その力を発達させるのに、だれが親たちを教えるのか

障害をもった子どもの母親は、力萎え、無関心になっていた、そこから脱出したとき
彼女は聖者か、反逆者になる
苦悩を希望にかえ、その魂を光で満たし、その声に愛を籠める母親は
子どもに優しく寄り添う力を見いだしている
彼女は　善意に澄みきっている、私の母親はこんな友人をもっている
彼女の顔の笑みは美しい

しかし、この子の故に仕事をやめねばならなかったと、子どもを責め、
忍ばねばならぬ、はてしのない雑事のみしか見ていない母親の心は、
苦痛と憤りに満ちて、重い
彼女は、理解と、いたわりと、助力を必要としている
このような母親は、心に幸福がなく、
子どもの悩みにも、自分の苦悩にも安らぎをえない

私は天才的に才能のある友人を知っている
彼は、才能のある子どもたちはしばしば家庭で理解されないと言う
両親は彼らを自分たちの虚栄心と誇りの対象とする
そして他人に自慢するために、演技を要求する
あるいは、子どもの方が進歩していて、要求が多いので
両親はそれに耐えきれなくなってしまう
天は、彼らの人生に特別な使命を与えることなしには
才能ある子どもを創りたまわなかったと、私は信じる
それは機械や薬を発明することかもしれない
あるいは人間を守るための問題を解決すること
人の目や耳を喜ばせる音楽や詩や芸術
あるいは、地球上のより高い正義に向かって新しい道を開くことかもしれない

しかし、もし彼らの特別な才能がさらに伸ばされなかったら
サッカー選手がネットで良い機会があるのに、ボールを場外に蹴ってしまうように
我々はこの恵まれた機会を失い、天の賜物を浪費することになる
才能のある子どもは、幼稚園の年齢になる前に、家庭の中で、その才能を伸ばすか、失うかしてしまう

しかし、この子どもたちの必要に答える方法を知っている家庭は少ない
ＯＭＥＰはそれに対して何かなし得るか

ここで最も重要なことを私はあなたに告げなければならない
子どもたちは遊ぶことを愛すると
彼らが宇宙の主人でいられたら、昼も夜も遊びにつかうだろう
疲労と眠りのみが、苦労せずに、遊びから子どもの気をそらすことができる
ある子どもたちは、おもちゃの真ん中で眠ってしまう、人形を抱いたまま
電車や、トラックや、積み木やパズルに囲まれて
親たちとの最大の論争は、遊びを中断し、
大事なおもちゃを残して食事にゆき入浴するときに起きる
（中略）
この手紙は長くなって私は疲れた、あなたももうすぐ終わりになることを願うだろう
最後に、私は言いたい、子どもたちは親を愛する、そして家族を愛すると
我々を家族に結び付ける臍の緒は、我々の身体と魂を発達させるのに必要な
栄養とエネルギーと愛とを供給しつづける

それがなかったら我々には何も残らない

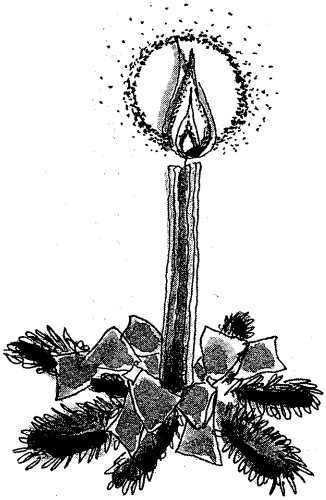
子どもたちは人生の多くのものを象徴している（未来、希望、よりよい世界の約束…）
あなたは家族が、健康で幸福な発達の良い風土となるための
平和の港となるように、あなたの最善をつくすようお願いする　」

理事会の冒頭、この長い詩が読まれ、人々は耳を傾けた。私は何度もうなずき、子どものことは世界共通に語れることを再認識した。

夏の終わりに、私の親しい方が突然亡くなった。小学生と中学生の子どもの母親で、まだ三〇代の若さだった。夕方、台所で夕飯の支度の最中に倒れ、中学生のお嬢さんが救急車で病院に運んだが、そのままだった。数か月前から、難病をかかえていることが分かり、それ以来、日常生活は普段の通りだったが、家族以外の人と会うことを拒否しておられたという。通夜の晩、ご主人が話されたことによると、この数か月、家族が一緒に過ごす時間を大切にしたが、これまでになく心の深いところでの交流がお互いにあったという。そして、妻が死んではじめて、この十数年の家庭生活が、天からの賜物だったと分かったと話された。大学の工学部を卒業して、人並み以上に高い能力をもったこの若い母親自身、家族と純粋に生きるところに最善の人生があることを悟っておられたらしい。こ

の若い夫婦のご両親たちは、この数か月間、家族の結び付きが強いので、傍に近寄ることもできなかったと語られたが、こういう危機に出会うと、家族の原型は、夫婦と子どもたちにあることが分かる。私は、「人は父母を離れ、夫婦が一体となる」という聖書のことばを、家族の観点から現実に見せられたように思った。そのひとりが欠けたことに心が痛むが、ここで育まれた家族の愛は見えないところで生き続けるに違いない。

（愛育養護学校）



あそびの研究(3)

韓国における十八世紀の子どもの遊び

朴　香俄

韓国における十八世紀は、国内外の圧力で社会的混乱の朝鮮中期から、民生の安定をはかるための方法を見つけることと、我を正しく認識する必要があることに目覚めた朝鮮後期にわたっていく時期である。社会状況は封建制度が倒れつつ近代化へと自ら動き始めていたし、西欧文物との出会いによって外に目を向けた時期として、すでにある先覚者は封建的世界観・国家観を克服して、社会的矛盾の改革、社会変化による現実的立場から新しい時代精神を持つべきことを、自覚していた。

その中で、李徳懋（一七四一―一七九三年）はこのような社会状況の中で教育改革の必要性を強く望んでいた学者として、教育が従来の封建支配時代の特別階層の所有物化から脱皮して、身分と職業を問

わずに人間の陶冶のために解放化と、初学教育の大衆化へと転換することを強調している。彼の教育思想は代表的な著作である『士小節』（一七七五年）によく現れている。

『士小節』は子どものための教訓書・礼儀作法の指針書という性格から李徳懋の時代における子ども観や教育観をともに理解できる内容を含んでいる。『士小節』は、男子・女子・子どもにおいて正しく実行すべき礼儀作法として、「士典」「婦儀」「童規」の三篇からなっており、「童規」篇は子どもが身につけるべき礼儀作法を、動止・教習・敬長・事物の四章にわけて細々と述べている。『士小節』を単なる教訓書としてみるかぎりでは礼の教育における規範的行動教育の指針の役割をする書物であるが、新しい観点からの解釈によると、『士小節』には子どもの遊びの様子や生活の実態に近い面が浮彫りになってくるのである。

儒学者である李徳懋は遊びを観念的に捕らえた面もあるが、『士小節』ではその当時の子どもの遊びを概念的な面だけで捕らえたのではなく、子どもの遊びの行為をあるがままに詳細に描いている。これらの繊細な観察力で述べている記録によって、私たちは子どもの遊びの世界だけでなく、子どもの日常生活の面までも理解することのできる成果を上げたといえよう。当時の書籍として、『士小節』のように子どもの遊びや日常生活をこれほど細々と述べた本はまだ発見されてない。

ここで、『士小節』の「童規」篇を手がかりとして韓国における十八世紀の子どもの遊びの世界を覗いてみることにしよう。

〈『士小節』に現れる子どもの遊び〉

『士小節』「童規」には日常レベルでの遊びが多く描写されている。これらの遊びを性格的特色に焦点をあててその内容を紹介し考察することにしよう。

(1) 礼を損なうものとしての遊び

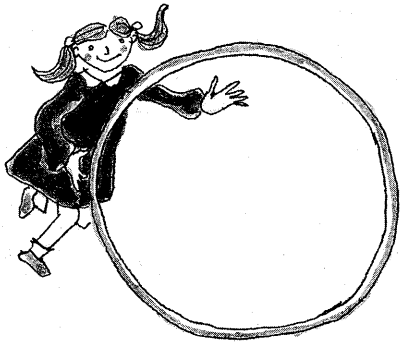
「子ども等は刃物や錐のような尖った鋭い器具を持って遊ぶことを好むので、誤って体を傷つけ痕が残ったり、あるいは瞳に刺さって片目になることがあるので、大人は常にこれを禁止すべきだ」（動止）、「でたら目に氷や雪を嚙ったり、雪氷を固めたりするのは容儀を損なうばかりでなく、頑固な病気になりやすい。孔子は、『父母はただ子弟が病気になるか心配する』と言った」（事物）のように、男の子は作業用具や工具をもって、遊ぶ機会が多い。特に、農業に直接携わった当時の庶民の子どもにはたとえば鎌なげ、釘うちなどの遊びがよく行われていたことを確認することができる。また氷滑り・雪だるま・雪なげ等は、子どもにとって冬の遊びとして盛んに行われ、楽しまれる遊びである。しかし、これらの遊びは身体に害を得て病気にいたることもあり、その上、病気は自分が苦しむばかりでなく親に不孝を招いてしまう結果となる。伝統的思考では、身体は祖先や親から頂いたものであるので、体が傷つき病気になることは祖先や親に対して不孝をする観念からのものであるといえよう。

「軍吏が叫んだり腰をかがめたりする禮節をいたずら半分に習い覚えてはいけないし、梵唄、打令、許邪、囉、雑声もまた覚えてはいけない」（動止）のように、子ども達が軍吏の行為を真似して遊ぶ様子がうかがえる。しかし、公的な礼節を遊びとして軽薄に扱って行うことに焦点が当てられて、これらのことを子どもがいたずらのようにまねをしたり、遊びとして行うことは結果的に無礼な人間に育て上げる恐れがあることになる。

以上のように、これらの遊びは父子の礼を損なうものとして、あるいは君臣の礼を損なうものとして禁ずるべきと述べられている。

(2) 人間性育成を阻害するものとしての遊び

「将棋・圍碁・雙陸・骨牌・闘錢・柶戯・意錢・従政圖・擲石毬・八道行成などを上手にできれば、父兄と友人はその才能と知恵を賞賛して奨励する。またよくできないと、人は皆嘲笑する」（事物）のように、将棋・囲碁・双六・骨牌・紙牌・柶戯・意錢・従政図・擲石毬・八道行成などは、子どもの競争心を助長し、勝ちたいという心理的背景を持った遊びである。その中で、柶戯は名節の娯楽として、あるいは従政図は官職への興味を持たせて進取的な遊びとして認められて子どもの間には盛んに行われていた。これらの遊びは、かなり才能と機知を生かして遊ぶものであるが、遊びを知っていれば才量があると賞賛し、知らなければ人からばかにされることと、遊びを行ううちに学問ばかりでなく精神的状態も乱れ、競争心だけが助長されることと、あるいは骨牌や銭なげ等の賭博に陥ってしまって、財産を使い果たし、刑罰をうけるはめになる恐れがあるものである。このように子どもの精神を乱し、物質的に損害をうけさせたり、学問にまで悪影響を及ぼすので、望ましい子どもの生活を営むのには適切な行



為でないと捉えられている。

(3) 悪習を産む源としての遊び

「凧上げは子どもを皆狂わせるので、もっと厳禁するべきである。凧上げをすると目が突出し、口が開き、頬が歪み、手があかぎれになる。また衣服は破れ、ぞうりや足袋も汚れる。人の家の垣根を越え、屋根を跨がり、崖から落ち、坑に陥ったり、また父親の紙や母親の糸を盗み、教訓に違反し、勉強を怠ける。甚だしきは勝負をかけるようになり、やがては互に殴ったり打ったりする。一つの遊びが百の悪習を身につけるようになる」（事物）のように、子どもが空を飛ぶ紙鳶を不思議そうに一生懸命見上げる瞳と、顔が空にむかっていて自然に開く口や、体が汚くなったり、傷がついても構わないことや、紙鳶について町や丘などを走り回る様子や、紙鳶を放さないと凧紐を握り人の垣根や屋根さえも怖がらずに、上ったりして紙鳶を調整する様子や、空を飛ぶ紙鳶を見上げている内に、足許の崖や溝も発見できず落ちたりする描写を通して遊びに熱中する姿、これらは李徳懋の観察力から生まれた生きた子どもの様子であるに違いない。このように李徳懋は、凧上げが興味深い遊びであることをよく見抜いているが、凧上げ遊び一つがすべての些細な礼節をおろそかにしてしまうことと、子どもの行為が乱れるばかりでなく体が害されること、親のものを盗むこと、勉強を怠けること、喧嘩をまねくことなど、凧上げという一つの遊び行為が百の悪習慣を招くことになる遊びとして、望ましくない行為として取り上げている。

(4) 生業の破壊としての遊び

「前に、家鳩（鶉鴿）を熱心に飼っている癖のある人を見たが、彼は鳩飼いに陥って意志を喪失して生業も廃してしまった。闘鶏も同じであって、これ又禁ずるべきだ」（事物）と記しているように、この

動物飼いは動物を可愛がったり、意図的ではないがこれらの行為をとおして楽しみを感じられるようである。昔から動物を飼うことは生計に困らない貴族階級の娯楽行為として行われたことが多かった。しかし、動物飼いは動物の可愛さに惹かれて生計を立てる意欲をなくし、やがては本職を忘却してしまう結果となる賭博のように思われていた。これらの遊びは学問と労作をともに大事にする著者の考え方に距離を感じさせるものとして、生業を手放して娯楽に陥っては困ることで当然禁ずるべき行為と捉えている。

(5) 真面目な学問的態度を侵害するものとしての遊び

「乱雑に墨汁を汚くぬってはならない。雑物を本の間に挟んで置くな。余白を切り取って使うな」（事物）、「地面に絵を描いたり、字を書くな。人がこれを踏むのを嫌うからである」（事物）、「指をもって空に文字を書くことは心が安定していない仕業である。筆に唾とか水をつけて硯の面や蓋に文字をでたらめに書いて散漫で秩序がなくなると、心もそれに伴って乱れるので恐れるべきことである」（事物）と記しているように、日常の生活で行われる行為としてめったに記録には残るようなものではないが、李徳懋は、幼い子どもがきれいな葉、絵のついている紙などのようなものを本の間に挟んでおき、大事にしているのをよくみている。また、子どもは字を憶え始めると字を地面に書いて字くらべをしたり、絵を描いて消す遊びをしたり、隠し絵・隠し字をして捜し当てる遊びが盛んになるのである。しかし、これらの行為は、字を憶え始める子どもに学習のために奨励するのではなく、文字や書冊、学用品などが子どもの遊び道具として利用されたり遊びの結果として浅ましく使われることは学問の不成功につながると判断しているようである。

(6) 悪戯としての遊び

「冬に火鉢を囲んで座り、火遊びをしながら灰に絵を描き鼻先や額に煤を付けたり髪の毛が焼け曲がることがあるが、これも一種の病気である」（動止）、「弓や矢を作って、乱らに射るな。人の家に石を投げるな。火薬をもって悪戯するな」（事物）、「客の驕や驢を潜かに乗って駆けるな。馬の尾の毛を抜くな。狂犬をからかうな」（事物）と記しているように、火遊び、灰遊び、弓、石投げなどの遊びが現われている。灰遊びや火遊びなどはいたずらによく遊ぶが、しかし危険であるのは確かである。このように、一般庶民の子どもには火を燃やしたり、灰皿を弄ぶことは日常的なことであり、弓・火薬・石なげなどは男の子によく行われる遊びでもある。結果的に、火遊び・弓・火薬・石なげなどの遊びは、子どもが扱うには危険であり、又、他人にまで悪影響を及ぼす可能性のあるものであることと、馬にのったり馬や狂犬をいじめることは動物の野性を引き起こす結果となり、危険にさらされることも予想されるので禁ずる行為と捉えているようである。

(7) 生き物を弄ぶものとしての遊び

「樹の皮を生のまま剝ぐな。鳥の羽を生きているまま抜くな。障壁を汚すな。柱や敷居に画を刻み込むな」（事物）、「緑樹に上って泣く蟬を捕まえるな。屋根に登り上がって雛子鳥を探すな。隣家の果実や花の枝を折るな。およそ、虫、鳥、草、木等一切生物を殺したり、傷つけてはならない。これはただ、わたくしの良心を壊すばかりでなく、落ちて足を損ね折ったり、刺されたりしてその害は一つ二つでない。新芽や春の松の液を嚙んだり、吸ってはならない」（事物）のように、ここには、花ずもう、葉取り、蟬取り、巣取りなどのこれらの遊びから子どもの生き生きとした生活が見受けられる。しかし、生物を弄ぶなどの生物が遊びの道具化する行為は望ましくないし、生活礼節観点からすると、これらの生

命のあるものを弄ぶ行為は徳目を育て上げる基礎時期としての子どもに望ましくない行動と見られたのであろう。

以上のように簡単に考察してきたこれらの遊びの描写には、子どもの日常生活での遊びが反映され、遊ぶ子どものいきいきしている様子が見受けられる。しかし、これらの遊びはすべて禁止すべき行為として捉えられている。その理由は、身分の区別なしに子どもであれば教育の対象となるという李徳懋の教育観から出発している。庶民の子どもは教育とは関わりがなく労作や娯楽を中心にして長い時間過ごしたともいえる。教育改革者である李徳懋としては、彼らの生活のなかで、感情的になりがちで奔放に動く人間にしてしまう可能性のある遊びを否定せざるをえないと思いつくことは必然であったと思われる。

〈おわりに〉

以上の『士小節』に現れる遊びを考察することで幾つかの結論を出すことができよう。

第一は、遊びに対する否定的な観点があるにせよ、『士小節』のなかには当時の生き生きとした子どもの遊びを垣間見ることができる。彼は特別に子どもに関心を寄せようとしたり、子どもの遊びを概念的に捉えてから描写しようとする意図を持っていなかったが、子ども特有の行為である遊びの世界が自然に目につき、放置された子どもとしては困るという観点から描写している様子から当時の遊びの様子や遊び観が見受けられる。

第二は、人間の能力や知識向上のための役割を果たす教育の一般化にともなって、一般の子どもにも教育が重要視されるようになり、教育的な行為と無駄な行為とに分離され、遊び行為は教育に害を与える無駄な行為となっていったといえよう。このような観点からすると韓国における十八世紀は遊びと教育が対立的関係ではあるが、二つの概念が相互関連的立場におかれるようになる始点であるといえよう。

第三は、『士小節』の時代の特徴は、子どもが教育の対象とか社会の様々な場面で顔を出し始めて大人の意識の世界に登場していた。すなわち、伝統社会では排除されていた庶民の子どもが実用社会で期待される存在として浮上してきたといえよう。期待される子ども像というのは、混沌・無秩序の世界のなかを生きて今までの社会の構造の中では排除されていたものが、教育を通して秩序的で均衡のとれた姿勢と教養ある態度をもつ存在になるということであろう。このように子どもが教育の対象として価値をもつ存在だと映り始めたということは、それまでは無視されていた子どもの日常の生活ぶりがはじめて目に留まるようになったということといえよう。

このように『士小節』の中には韓国における「子どもへの関心の表明期」としての特徴を導き出すことができるし、十八世紀を「子どもへのまなざしの変化期」として類推することができる。すなわち、子どもらが価値のない存在から価値のある存在へ

と、大人の無関心の対象から特別な関心を引く対象として、子ども期のなかったものから子ども期という特有の時期を持つ者へと、手放されていた存在から教育的配慮や指導を受ける者として、無関心から大人の心理的負担感をもたせる者へと、無秩序の世界から大人の統制を受けるべき存在として、感覚的な遊び行為を振る舞うものから理性的に考えて行動する存在へと、このようにこの時期の子どもの存在はかなり変化の途をたどっていたといえよう。

第四は、『士小節』は、時流を敏感に感じた学者の学問的成果であるばかりでなく、遊びを子どもの教育との関連で言及することにおいて、子どもに関する新しい視点を提示した意義深い書物である。これからも研究されうる余地のある書物として、十八世紀の韓国における子どもに関する精神史研究などに重要な位置を占めるものと思われる。

（韓国　慶南大学校）

参考資料

朴　香俄「伝統社会の教育と遊び」保育学研究　日本保育学会（一九九一）

朴　香俄「十八世紀の韓国における子どもの遊びに関する研究」お茶の水女子大学　学位論文（一九九三）

お正月さんがやってくる(1)

～二人のおばあちゃんの会話より～

はる・みつ

はる　こんにちは、今日は、みつさんに子どもの頃の故郷の、暮の、お正月の準備の様子の話を聞かせていただきます。よろしくお願いします。

みつ　こんにちは。私は仙台の農家の生まれで、東京で結婚しました。今年、喜寿（七十七歳）を祝ってもらいました。

はる　私は今年、古稀（七〇歳）を迎えたんですよ。東京の商家の生まれで、暮というと大人達が、せわしなく、忙しく働いていたのと一緒に、お正月の準備の中で、わくわくしたのを思い出しますが、みつさんの子どもの頃は、どうでしたか？

はる　そりゃもう、今よりずっと、何というか、空気にキリッと張りがあって、お正月が来るというのは嬉しいもんだったねえ。大人達は、子どもに構ってなんかいられない。とにかく忙しそうだった。暮は、子どもは邪魔になるから叱られてばかりなんだけれど、それでも普段は、野良に出て家にいない大人達が見える所にいるから嬉しかったね。母さんが夜なべ仕事に、姉さんの着物の余りで新しいべべを作ってくれるのが嬉しくてね。赤い新しいべべが、毎日少しずつできていくのがね―。

十二月に入ると、お正月の支度が始まったよ。家に

よっては、まだ、その年収穫した米の稲こきをしている頃なんだけどね。

まず、たくわん、白菜、山東菜……あと何だったかね……漬け物は十五日位までには漬け終わったね。野菜は全部、自給自足だから、雪の下から掘り出して、室に入れたり、大根を干したり。子どもはよく、大根を揉まされたよ。甘塩から塩の濃い物まで、いろいろ作ったね。日持ちしないと冬を越せないからね。お正月の準備でもあるんだけれど、その冬の保存食を作ったんだよ。たくさん漬けたよ。

それから大掃除。すす払いだね。家の中の物を全部何から何まで外に出すんだよ。たんすからふとんから、世帯道具全部、陽に当てて、すす払って。家の中も、囲炉裏だからすすだらけになってるのを隅々まで、すすを払うんだ。

すす払いがすむと、男の人達が、囲炉裏の上の棚に、来年用のお米を、四斗俵で何俵も上げたもんだ。囲炉裏の上は煙で、虫よけになるって、うんじゃなど

ね。米に虫はついたね。その年の収穫によって悪い米の時もあるんだよ。でもそんな事は言ってられないからね、次の年、冷害や、台風や、ひでりや、何があろうと生きていけるよう、一年分の米を上げておくんだよ。うちは十俵から十二俵位上げてたかねえ。

そうそう。海辺の漁師町から、お正月用の魚を売る行商の人がやってきたね。新巻鮭、鰤（ぶり）、干し数の子、昆布、するめいか、鱈なんかを買ったかね。するめいかと昆布は細く切って、鱈、数の子と漬けこんでおくのよ。そう、松前漬のようなものだね。これがおいしくてね。お正月のお客様用なんだけれど、隠れてつまんで、よく叱られたよ。たくさん作っておいてあるから、少し位つまんでもわからないだろうと思うんだけど、少しじゃ止まらなかったのかね。親は減っているのがちゃんとわかるんだね。「コラーッまたやったな」って。おいしかったよ。アッハハハ。

暮が迫ってくると、お正月のおせち用に鮭を焼いた

紙巻麩の野菜　こんにゃくてたくさん作っておいたよ。今よりずっと寒かったからいたまなかったよ。これも、つまんで叱られた。お正月用の御馳走が入っている戸棚の一番下が、気になって気になってしょうがなかったもんだ。

この御馳走を、年越しから食べたよ。年越しっていうのは、お正月さんを迎えるんだから、食器も晴れの食器で、白いごはんで、がまんしてきた御馳走だから、本当においしかった。

そうそう、年越しの魚に位があったでしょう？　仙台にいる時は、鮭で年越しが、いい方だと思ってたんだけど、長野の士族出のおじいさんと結婚した初めての年越しに、「士族は、鰤で年越しだ」って教えられてね。「へぇー、鰤が一番なんだ」と妙に感心したもんだ。鮭がその次、その次が鰯だったかなあ。だから結婚してからは、鰤で年を越したよ。ほら、出世魚っていわれるだろ、士族は大変だなとも思ったね。

はる　東京の駒込で、うちは商売をしていたんです。私は四人兄弟の末っ子で　暮というと両親や　小僧さん、姉やさん、皆忙しそうだった。三十一日は掛け取り――集金かしらね――で大忙し。でも、大そうじ、すす払い、畳あげ、おせち作り……参加すると――子どもだから、役に立ったのかどうか――ほめてもらえて、兄や、姉やさんに、洋食屋さんや、そば屋さんに食べに連れていってもらったのを覚えているわ。

お正月の準備で、嬉しかったのは、晴着の準備。洗い張りをして、縫い直したり、縫いに出したり、足袋、下駄まできれいにして揃えて、男の子だって、銘仙やかすりで、お対の着物を用意してもらってね。下駄屋さんに、お正月用の赤い鼻緒のぽっくりが並んでたねぇ。それから三十一日の夜中まで忙しそうだった髪結いさんも思い出すわ。

年越しは蕎麦だった、魚は鰤だったわね。お正月は来客が多くて、おせち料理はたくさん作ってたわね。よく働いたものなのね。

そして、二十八日の家族総出のもちつき。二十九日

は、もちをついてはいけない日でしたね。

そうそう、二十八日のもちつき。繭玉にして水木の枝につけて、お正月用に囲炉裏の上に飾ったねえ。障子を張り替えて、畳も、普段の薄いのを、晴れの日用の厚い畳に変えて、――正月二十日頃には又、納戸にしまってしまうんだけれどね――いよいよ、お正月さんがやってくるって気分になったもんだ。

二十九日を過ぎるとね、父さんか、年男がいるとその人がその年のもち米のワラで、しめ飾りをない始めるのよ。出来上がると、その家の主人が、井戸、かまど、裏の明神様、それから厩（うまや）にしめ飾りを飾るんだけど、子ども達も深妙な顔して後からついていったもんだ。一夜飾りはいけないっていうから、三十日だね、そうすると、いよいよ、お正月さんが、井戸とかまどと、明神様と厩にやってくるのが近づくわけ。そりゃドキドキしたもんだよ。

はる　東京では、門松をとび職の人達が作り始めましたね。門松は立てましたか？

みつ　うちの地方は、門松は立てなかったね。お正月さんがやってくるのは、しめ飾りの所だと思って大きくなったよ。いよいよ大晦日、今は、夜になっても、まだお正月の準備をしてるけれど、昔は、陽が落ちると、家族皆で年越しのお膳を囲んでたように思うよ。あんなに忙しくしてたのに、大晦日は着物を着かえて、御馳走を囲んで、お正月さんを迎えてた。

はる　こうして、お正月さんがやってきたんですねえ。

――つづく――

カット・佐藤和代

幼児の言葉の記録

～「聞いちゃった！」の実践より～

国広　勝代

一　はじめに

幼児教育の現場では、子どもたちの楽しい会話、自己主張する言葉、感嘆の声などが飛び交っています。保育者はそれらの言葉を聞いて、幼児の考えや心情を受け止め、いっしょに笑ったり、喜んだり、心の中で励ましたりしながら幼児とともに生活しています。

この時期は幼児が人間として成長していく大切な過程であり、我々は子どもの様々な表現を認め、育んでいこうとしています。そのひとつに言葉があります。幼児がみずみずしい感性で受け止めたことを幼児自身の言葉で表現することを大切にし、幼児がたどたどしい言葉で一生懸命伝えようとする姿を温

かく見守り、耳を傾けるという環境が子どもの成長にとって大変重要だと考えています。

そこで、園と家庭との連携によって、よりよい言語環境を作り上げていくために、本園では「聞いちゃった！」という活動を実施しています。

二　実践にあたって

活動にあたっては「聞いちゃった！」用紙を作成し、家庭に配布しました。その用紙に家族が聞いた幼児の楽しい会話などを記録し、聞いた人の感想をそえて、幼稚園に提出（本園では提出箱を作り、これを「聞いちゃったポスト」とした）してもらっています。これは親の主体的な活動として投げかけており、強制はしていませんが、この記録が幼児の成長の証として貴重な財産になることを理解していただいております。

記録内容は次のとおりです。

◎「聞いちゃった！」の記録事項について

一枚の紙（B5判）の記録事項は、日時、天候、場所、幼児氏名、聞いた人、聞いた言葉、聞いた人の一言、という項目で成り立っています。

日時、天候、場所については、その場にいない教師が幼児の言葉を理解する手がかりとして、また、時間が経過した際も言葉をいきいきとさせるために必要と考えました。

聞いた人の一言は幼児の言葉のどんなところに魅力を感じて記録しているのか、親の関心がよく把握できると考えたからです。

三　記録された幼児の言葉について

提出された「聞いちゃった！」の内容から記録者の興味や関心がどのようなところにあるのかを調べてみると、大きく二つの側面があるように思われました。

そのひとつは子どもの言葉の表現方法そのものへの関心であり、もうひとつは言葉の背景にある幼児の姿や心情への関心ということができます。

言葉の表現方法そのものについては、更にその内容が(1)同音異義の表現　(2)比喩の表現　(3)因果関係の表現　(4)文法的な誤りや言葉の意味の認識の違いから起こる表現　などに分けられました。

言葉の背景にある幼児の姿や心情については、聞いた人の興味・関心が感情的であり、個人的な価値基準による場合が多いのでまとめるのは難しいことですが、(5)大人の言葉を模倣している場合　(6)幼児の成長発達に喜びを感じた場合　(7)愛他心の育ちをうれしく思った場合　(8)幼児の発想や行動に感心した場合　などを上げることができます。この類の記録は家族だからこそ採取された言葉のように思われます。

それぞれについて例を上げてみると次のようなものがあります。

(1)同音異義の表現

―四歳　男児―

車の中から犬を二匹散歩させている人を見て

子「あっ　いぬが二人だ」

母「ん？　犬は二人でなくて二匹って言うんよ」

子「ふーん」「じゃ牛は？」

母「一とう　二とう　ってかぞえるんよ」

子「それはうんどうかいでしょう」

《聞いた人の一言》母

なるほど、一等・二等もあるもんなー、と感心させられる。子どもの経験が一つ一つ知識としてつみ重ねられているんでしょうね。

(2)比喩の表現

―五歳　女児―

こどもずかんを一人で見ていました。

「からだ」のページで〝たべもののゆくえ〟というところで

子「おなかの中って迷路みたいだね」

私はなんのことかわからず、本を見るとイラストでわかりやすく体の中のことが書いてありました。

母「ほんとうだね」

子「この前、私がおなかが痛かったとき、食べ物が道をまちがえてゴールまでいかなかったんだね きっと……」

母「そうだね いつもゴールまでまちがわないといいね」

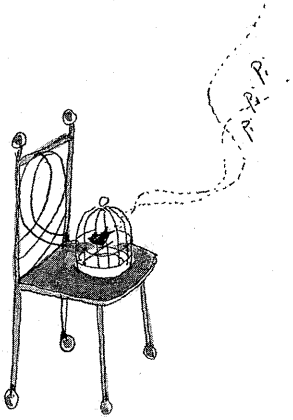
《聞いた人の一言》母

食物が口から入って排泄までを迷路とは。でも、なるほどなと驚きです。

(3) 因果関係の表現

—三歳 男児—

秋も終わりに近い頃、孫と鴻の峯にのぼった時の話である。突然、孫が「あっトンボ！」と言いながら、ギンヤンマをつまみあげ、そして叫んだ。「死んでる！」まるで生きていたかのようなトンボを見ながら、「あのね、寒くなると虫は、みんな死んじゃうんだよ。」と言って聞かせる。「ふーん。みんな死んじゃうの……カワイソウ」と、今にも泣きそうな顔でつぶや



く。トンボが秋深くなれば死ぬことについて当然のことと思っていた私は、孫の言葉に不意をつかれた感じで「そうだよ。車につぶされると可愛そうだから、そこの草の上に、置いてやりなさいよ。」と言う。そして、その帰り道、孫がぽっそりとつぶやいた。「寒くなると、おじいちゃんも死んじゃうの？」

《聞いた人の一言》祖父

更に、道に散らばる蟬の死骸などを見て、幼いながらも「死」というものを、深刻に感じとったようである。

(4)文法的な誤りや言葉の意味の認識の違いから起こる表現

―四歳　女児―

S子「きょうは　がっかりしてた」

母　「なにを　がっかりしたの」

S子「だって図書の本を借りれなかったもの、お母さんががっかりして本を持って行くのをわすれたでしょ」

母　「……？　あっ、うっかりしてたね。あしたは持って行くから次の本借りようね」

《聞いた人の一言》母

うっかりとがっかりをまちがえたようだ。

(5)大人の言葉を模倣した場合

―五歳　女児―

Y子が電話に出たときのことです。

「はい　Yでございます……。

はい　母がおります……。

いま　かわりますので　お待ちください。」

《聞いた人の一言》母

わたし、負けそう。よく聞いていますネ。

(6)幼児の成長発達に喜びを感じた場合

―四歳　男児―

お手伝いする時（金魚のえさやり）

「どうしてぼくだけやらんといけないの」
「あーあ」と言いながらやっている
「まあいいか　お兄ちゃんだから……」

《聞いた人の一言》母

自分が長女で「お姉さんだから」と意識することが多く、できるだけ上の子だからといってがまんさせたりプレッシャーをかけたりしたくないと思って育ててきたつもりだが、無意識のうちにお兄ちゃんだから我慢して頑張ってほしいということを期待しているのかもしれないと、反省させられた。それにしてもこの言葉はうれしく思う。本人が兄としての自信をつけてきたのかな。とても素直な言葉だった。

(7)愛他心の育ちをうれしく思った場合

―四歳　女児―

「おかあさん　おなかの赤ちゃんもう六月だから生まれるよネ、私ネ、女の赤ちゃんのほうがいい。だってネ、私、女のおもちゃしか持っていないから……おとこの赤ちゃんだったらおかあさんおもちゃ買ってあげてネ。女の子の赤ちゃんだったらおもちゃも小さいころの服、靴、かしてあげるよ」
「そう　そうおもっているの」

《聞いた人の一言》母

赤ちゃんが産まれることを知ると、子どもなりに考えたり興味をもったりでいろんな話が出ています。

(8)幼児の発想や行動に感心した場合

―四歳　女児―

待ちに待ったピアノのおさらい会が無事終わった時、祖母と話をしていて
祖母「Eちゃん　よくがんばったね」
E子「うん　やったよ。ピアノをひいたあとの時おばあちゃんがいっぱい笑ってたね。」
祖母「おばあちゃん　うれしかったよ。」
E子「おばあちゃんの白い頭がよく見えたよ。おばあちゃん　E子もおばあちゃんになったらしろ～くな

るの？　でも、E子はピンクがいいなー。」

祖母「えー。」

《聞いた人の一言》母

この会話を聞いて思わず笑ってしまいました。祖母も嬉しいのかずっと笑いっ放し。愉快な一日でした。

右記のように、大人が時間に追われる生活の中で子どもの言葉に耳を傾け、たとえそれが間違った言葉遣いであっても、成長の過程としてすなおに受け止めたり、むしろ記録者の方が大人になって忘れかけていたものに気づかされたりしていることが分かります。

幼児の言葉をそのまま受け入れる家族の態度によって子どもも自信をもち、家族関係もまたよりよい方向へと進んでいるようです。

四　この活動をとおして得たもの

「聞いちゃった！」用紙の提出は、開始以来ほぼ毎日のように続いています。しかし、六か月経過時には提出者が片寄っていたり、提出していない親の中から「うちの子どもはおもしろいことをなにも言わないんですが……」といった相談があったり、「いっぱいありすぎて、書き忘れてしまう」という悩みも聞かれるなどの問題点も浮かび上がってきました。この活動の目的は、家庭で子どもの言葉に興味をもってもらうことですから、なるべく多くの親が参加してくれることを願っています。そこで、幼児理解のために話し合う機会をもったり、記録の工夫について意見交換をしたりしました。また、「聞いちゃった！」をまとめた、〝子どものことば〟集を発刊し、子どもをありのままに受け止めようとする親の意識を高めていきました。

実際に記録をつけた人々からは、様々な反応があり、この活動を通して幼児の言葉を聞くことが楽しくなったという声や、子どもの素晴らしさを発見す

ることが多くなったという感想などが聞かれるようになりました。また、幼児の言葉を正確に記憶しようとして子どもへの返事や対応が遅れてしまうことを反省している母親もみられました。さらに、この活動は幼児の心象風景を描いていることなので、その前段階として、幼児のこころのくみ取り方を勉強した方がよりよい記録を残せるのではないかなど積極的な意見も聞かれるようになりました。

この活動から、家族の和ができたり、〝子どものことば〟集を話題にして母親間の輪が広がったり、ご近所の方も読むのを楽しみになさるなどの副産物もたくさん産まれました。

これらのことを大切にしながらこれからも活動を継続していきたいと考えています。それは、いちばん身近な親が幼児の言葉に耳を傾けるようになることであり、会話が通い合い、コミュニケーションがうまくいくことで幼児の言語生活を望ましいものにしていくことが可能であると考えるからです。

幼児が何を思い、何を愛し、何を自分で選ぶのかという根源的なものを育てるため、目には見え難い幼児教育ですが、こうした地道な活動を大切にしていきたいと思っております。

（山口女子大学附属幼稚園・副園長）

参考文献

石川正一・国広勝代「幼児の言語的環境に関する研究(2)―家庭との連携についての実践報告―」一九九三　幼児教育研究紀要　山口女子大学附属幼稚園

充実した時間

田中都慈子

この頃は、毎日が忙しく一年があっという間に過ぎていく。しかしその中で、ふと子どもたちと何かに夢中になって過ごす時がある。

充実して楽しく、後になって思いかえしても「よかった」と思うような時である。

ある日、K子ちゃんがよびにきて「一緒に遊ぼう」というので、山の上（園庭の一部でそうよばれている場所）へ行こうということになり、木々の間の道を登って山の上に出た。

ままごとをしている子どもたち数人と、ジャングルジムにのぼっている子どもたちがいて、静かな雰囲気であった。

K子ちゃんは、クローバーの花をつむといってつみはじめ、おおばこの茎でおすもうをしたりした。「もしかして四つ葉のクローバーが見つかるかもしれないわよ」といったら、探すということになり、あっちこっち移動しながら、なんと四枚も見つけることができた。K子ちゃんは、それをもって大喜び。たまたまその日に幼稚園に観察にみえていた大学の先生とも御一緒に、数人の子どもたちもつられて探しまわり、食事の時間まで粘り強く続いた。後で伺った話では、K子ちゃんも担任の先生に「楽しかった」といっていたそうである。あれから廊下で会うと、「また探しにいこうね」という。大学の先生も「はじめての四つ葉探しでした。楽しい時間でした」といわれた。

また、三歳のMくんとSくんと一緒に虫探しをした時も、虫かごをもち、どこかに虫はいないかなと思いながら園庭を歩き回ったが、なかなか見つからない。ふと見ると、小枝から、くもの糸にぶら下がった枯れ葉を見つけた。何もしないのに枯れ葉が、宙に浮いて風にゆれている。息を吹きかけて風をつくる。三人で吹いたらあまりの大風にはっぱは飛んでいって、枝の中に消えてしまった。

じっと見つめる子どもたちの真剣な目。「不思議だね」「おもしろいね」

口々にいって、また別の不思議なものを探しに出発した。

穴を見つければ、「これは何んだろう」。自然の中に、新しいものを見る。

「くだらない」といってしまえばそれまでだが、その意味のないようなことの中に大事なことが含まれているように思う。

「こんな家がつくりたいな」と子どもたちにいわれ、頭をかかえて、ああでもない、こうでもないと一緒に考えているうちに、形もはっきりしてくると、子どもたちも私も、だんだん夢中になってくる。そういう時間もまた、過ぎた後に充足感をもたらす。

集中して物事にとりくむことが出来るようになる下地は、小さい頃からの生活の中にあると思う。それを助けることのできる大人でありたい。そして一緒に熱中し、そこに幸せを感じる心を持ち続けたいと願う。そして、そのような時間が持てた時、本当にうれしく思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

家庭科教育の男女共修をむかえて(4)

中学生の保育体験学習に学ぶ

佐野　幸子

「環境による保育・教育はすばらしい」。これが、今回の教育実践を通しての私の実感である。

中学校学習指導要領の改定により、技術・家庭科の授業が男女共修となった。本校では、「木工加工」、「家庭生活」、「電気」、「食物」、「保育」および「情報基礎」の六領域について男女共修を導入したが、ここでは、第三学年における「保育」を中心にこれまでの取り組みについて報告したい。

領域「保育」の目標は、「幼児に対する理解や関心を深める」ことである。この目標を達成するためには、子育てや保育を単に教室での授業だけでなく、保育所に出かけ、幼児と直接触れ合う機会を通して、体験的に学習させることが大切であると考えられる。

最近は、核家族化・少子化が進む中で、幼児と触れ合う機会が少なくなってきている。さらに、第二自己主張期（第二反抗期）にある中学生時代は、自我を確立していく上で、極めて重要な時期でもある。この時期に保育の領域を体験的に学習することによって、幼児のことを

理解するとともに、自分がどのように生まれ育ってきたかを考えながら自己理解を深め、家族や周囲の人々の愛情に包まれて成長してきたことに気づかせ、感謝の気持ちを育てたい。また幼児への温かい心情を養い、これからの自分の生き方に目を向けさせたい。

このように、保育の体験学習が豊かな人間形成に果たす役割は大きく、男女生徒が共に保育を体験し、学び合うことに価値があると考え、平成五年度から男女共修による保育学習を導入した次第である。

〈保育指導の流れ〉

本校の三年生は八クラス、三〇九名である。生徒のきょうだい数は、二人が約五四%と断然多く、次いで三人が約二九%となっており、一人っ子が約一二%で、四人以上は五%程度である。身近に幼児と接する機会のある者は、全体の三割程度にすぎない。

保育学習は、三年生全員を対象に、事前指導等を含め、合計三五時間（一時間は五〇分）にわたり行われた。まず、幼児の心身の成長と発達についての基礎を学び、加えて生徒の興味や関心、意欲を高めるために「狼に育てられた子」およびVTR「さくらんぼぼうや」を教材として使用した。

実習は、本校の近くにある助任（すけとお）保育園（私立認可保育園）で、初夏と秋の二回、一回当り二時間、クラス単位で実施された。保育園訪問回数は、延べ一六回であった。大勢の中学生が次々と保育園を訪問したので、保育園もさぞ大変であったろうと思う。しかし、中学生の保育体験の今日的意義を熟知されている上野隆園長と全職員並びに保育者の全面的協力と支援によって、滞りなく実施することができた。

助任保育園には、一～五歳までの幼児一二〇名が通っている。職員は一四名。広い園庭にゆったりと園舎が建てられ、閑静な住宅地と神社境内に囲まれるという自然環境にも恵まれている。児童憲章の精神に学び「地域に開かれた保育」を目指し、地域とともに歩み続けている保育園である。本校には、ここを卒園した生徒がかなり

在籍している。

第一回目の保育実習は、園児と接して、幼児の遊び、ことば、生活などを知り、幼児に対する関心を高めるという目標のもとに行われた。実習の後、心身の発達に応じた遊びについて考え、一緒に遊んだ幼児のために遊具などを製作し、これらを持参して第二回目の保育実習を実施した。

〈「さくらんぼぼうや」を視聴して〉

「さくらんぼぼうや」、保育関係者なら誰もが知っているVTR。その評価については多少意見の分かれるところであるが、それはさておき、生徒たちは、これを見てどう感じたのであろうか。ある女子生徒は次のように感想を書いている。

私は、幼いころテレビばかり見ていたように思う。自然の中で遊びまわることはあまりしなかった。このビデオを見て幼い時にたくさん遊んで運動することが大切なことを知った。自分がもう少し遊んでいたら、体力もついていたかなと思った。今は小さい子でも小学校の受験などで遊んだりする時間が少ない子がいる。そんな子たちは、かわいそうだと思う。親にもこのビデオを見せてやりたいと思う。この時期に丈夫な体と体力をつくらないと、体が弱く、病気がちで骨も弱くなると思う。

（M子）

M子は、自分の幼児期の体験と現在の自分の弱さとをビデオに登場する幼児の姿と対比させながら、幼児期における遊びの重要性に気づいたようである。しかも、最近問題となっている「幼児の自由と遊びを奪ってまでの早期教育」に対して鋭い批判の目を向けている。「親にもこのビデオを見せてやりたい」という表現に今の中学生に共通する心情が込められているようだ。とにかく、保育体験学習への導入としては、まずまずといったところである。

〈保育実習と遊具作り〉

いよいよ保育実習の日がやってきた。園児たちが中学生を受け入れてくれるだろうか、上手に幼児に接してくれるだろうか、幼児にけがをさせたりしないだろうか、教師としては、何かと不安であったが、園児との初対面は、思いの外スムーズであった。

おおぜいのおにいちゃん、おねえちゃんの訪問を歓迎してくれたのである。これも園側の周到な準備と配慮のおかげであるが、後に上野園長らは、そのときの様子を、日本保育学会で、「実習の中学生を迎えた園児達の思わずわき上がった歓声、人見知りせず甘えて体ごとぶつかっていく純真な幼児の姿に、実習生の緊張も解きほぐされて、遊びの中で繰り広げられた大きな中学生と園児達の、のびのびとした交歓風景は、保育者保育に見られない新鮮な感動があった」と述べている。

すぐに幼児の中に入り楽しそうに童心に戻って遊ぶ生徒、うちとけるまでに時間はかかったが、幼児と一緒に遊べるようになった生徒、よちよち歩きの子の手をとっ

▶幼児に絵本を読んであげる

て歩く生徒、ブランコをおしてあげたりして汗だくになって一生懸命に相手をしている生徒。教師の心配をよそに、思い思いに幼児にとけこんでいった。

教室ではあまり目立たない生徒が、幼児と接するのがとても上手で、子どもたちに好かれ、生き生きとするなど、授業では発見できない場面を次々に目の当りにして、感激することしきりであった。

次は遊具作りである。その年齢にふさわしいおもちゃ、その子に合ったおもちゃ、どんなものを作れば、幼児が興味を示し、喜んで遊ぶだろうか。班ごとに話し合わせ、計画・製作させた。スムーズに作業が進んだ班もあったが、紙芝居を作ることになった班では、幼児に理解してもらえるだろうか、喜んでもらえるだろうかとストーリーを決めるのに苦労していた。また、ペープサートを製作した班は、授業中だけでは練習時間が足りなくて、ある生徒の家に集まって長時間練習していたようである。

教室の雰囲気は、いつもと違っていた。生徒たちは、皆真剣である。目を輝かせ、ほとんどの生徒が作業に没頭していたのである。どの班も男女が協力し、役割分担を決めて意欲的に楽しく取り組んだ。

それぞれの班で製作した遊具を持参して再び保育園を訪問した。二回目でもあり、自分が作った遊具で幼児と遊ぶという目標もあるので、生徒たちははりきっていた。幼児と真剣に向かい合う生徒たちの姿に心をうたれたものである。

〈保育実習で学んだこと〉

こうした保育実習で生徒たちは、何を感じ、何を学んだのであろうか。保育園と共同で実施した意識調査や感想文などで、その一端を知ることができる。

三年間にわたる技術・家庭科の授業を生徒に振り返ってもらったところ、「保育実習が一番楽しかった」とした者が圧倒的であった。一口コメントでは、「一人一人の個性というか、感情が伝わってきたことや、三歳―四歳の子が思いやりとか人のこととかを考える事ができる

ことに驚きました」（女子）、「保育所の先生は、大変だなあと思った。母が保育所の先生なので、けっこう母も頑張っているんだと思った」（男子）、「最初、保育を学習して、何の得があるのかと思っていたが、勉強していくうちに、僕が結婚したら、役に立つだろうと思った」（男子）など、いろいろな思いを書いていた。

図1は、「保育実習をしてどうでしたか」という設問に対する回答をまとめたものである。実習した女子生徒の六五%が「とても良かった」と答え、これに「良かった」を加えると、実に九〇%強となっていた。男子生徒も、約七〇%が、保育実習を肯定的に受け入れていた。

「実習して良かったことは何か」に対しては、「幼児の実態がわかった」が約六五%と最も多く、次いで、「幼児がよく懐いてくれた」約四五%、「授業だけでなく良かった」四三%となっていた。一方「実習してみてあまり感心しなかったこと」に対しては、「時間が足りなかった」（約六五%）、「二回では物足りなかった」（約五七%）などの回答が多くなっており、この点からも、

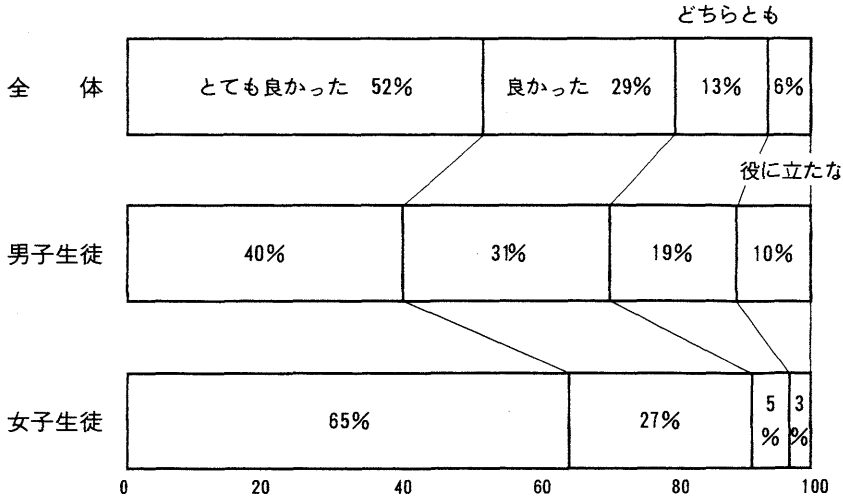


図1　保育実習に対する生徒の感想

生徒達が保育実習を楽しみ、意欲的にこれに取り組んでいたことがうかがえる（詳細は、上野ら「保育実習を体験した中学三年生の意識調査」、日本保育学会第47回大会、発表論文集、一九九四、を参照されたし）。

〈感想文にみる生徒の感動体験〉

やって来ました助任保育園。園長先生が「幼児たちの中には、うれしいことを上手に表現できずに、蹴ったりする子がいる」とおっしゃった。僕は、説明を聞いている間、期待と不安、むしろ不安がほとんどだったと思います。幼児たちと仲良くできるだろうか、嫌われたらどうしようか、ということを考えていました。

そして僕はメロン組（三歳児）に行きました。部屋に入ってからは、何をすればよいのか分からずにいました。しばらくしてから本を読んであげようと思って、読んであげました。本当に素直に答えてくれました。でも、飽きるのも早くて、懸命に相手をしていないと思いました。保母さんたちは本当に疲れるなと思いましたが、子どもが本当に好きだから苦にならないのではと思ったりもしました。

ここで僕が見て思った幼児のことについて少し書きます。様子を一言で表現すると、「十人十色」です。負けん気の強い子、絵を描くのが好きな子、強い、かっこいいことの真似を盛んにしている子、本が好きな子、自分一人の力で頑張ろうとしている子、料理に興味を持っている子、実は甘えたい子、中でも一番印象に残ったのは、譲ることを身につけていた子です。二人の子がそれぞれに本を持って来た時、互いに一度読んだことがある本を相手が持っていました。けんかになったらどうしようと思っていたら、一人の子が、「そっちでいいよ」と言ってくれました。嫌々あきらめたのではなかったので、目から鱗が落ちたような驚きと、感動を覚えました。

以前、ＶＴＲを見た時に、雪の中で手足を真っ青にして遊んでいる子どもたちがいた。子どもたちは雪の

冷たさより、遊ぶことを止められることが苦痛になる、ということを聞いた覚えがあります。子どもたちの自主性や意欲を育てることを大事にするわけです。僕は幼児たちに接して、幼児の保育の重要性を改めて感じました。保育はとても難しいと思いますが、大人になって小さい子どもの世話をするとき、十分なことはできないと思います。でも、我慢することだけはできると思います。保育園訪問は貴重な体験になったと思います。

（K男）

これは、男子生徒が書いた感想文（全文）である。なんとみずみずしい感受性を持っているのだろうか。幼児に向けられた優しい心と鋭い観察力、そして幼児の行動を客観的に分析する力などなど、驚かされることばかりである。こんな感想を書いた生徒が、男女を問わず、非常に多かったのである。

〈まとめにかえて〉

遅まきながら、日本の社会も「子育ては母親の責任」から「父母共育て」の時代になりつつある。また、「家庭保育至上主義」から「家庭も保育所も」という少子・核家族化時代に合った保育形態が確立されようとしている。

こうした時期に、男子と女子が、一緒になって、保育所という場で、保育を体験学習したことに特に意義を認めたい。将来、家庭を持ったとき、この経験を生かしてくれるのではないかと思う。

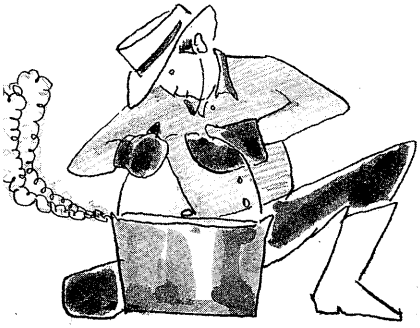
ところで、私自身、生徒たちが、これほど保育に感動し、意欲的になるとは考えていなかった。先の感想文でK男は、「目から鱗が落ちたような驚きと感動」と表現しているが、教師としての私もまさに同じ体験となった。最近、発表された文部省の学校基本調査の速報値でも、昨年の不登校児童・生徒数は、さらに増加し、中学生では八一名に一人の割合となっている。いじめ、校内暴力なども増加傾向にあるという。最近の中学生は、個性がない、自分の殻に閉じ込もっている、無気力で無感

動である、友だち関係が持てない、などといわれている。

はたしてそうであろうか。少なくとも、半年間にわたる保育指導と保育実践の中では、そんな行動をとる生徒は、殆どいなかった。中学生は個性がないのではない。無気力・無感動ではないのだ。適切な教材と、自主的・自発的に学習しうる環境さえ用意すれば、生徒の内に潜む感性と能力を引き出し、高めることができるのではないかと痛感したのである。

新保育所保育指針の基本理念は、「環境による保育」を実施することにある。助任保育園は、その実践においても、卓越した保育園の一つである。ここでいう「環境」には、自然、遊具、保育者を初めとする人的環境などが含まれるが、中学校における技術・家庭科の学習に際しても、基本的には同じことがあてはまると思う。力量不足ではあるが、「生徒に学び、生徒の内面に響く、そして生徒の思考をくぐる教育」に少しでも近づける教師を目指したいと思う。こうした機会を提供下さった園児たち、先生方、そして本校の生徒達に感謝の気持ちでいっぱいである。

（徳島市立徳島中学校教諭）



子どもたちへのまなざし (10)

ふれあい

松井　とし

秋のある日、疲れて帰宅すると玄関のドアーに小さな紙が貼ってあった。たどたどしい漢字で松井様と書かれた模様入りの小さな便箋を開くと、それは下のような手紙であった。

よく見ると何度も消しゴムで消し、書き直したあとがある。思いがけない手紙を手にして、私は一日の仕事で疲れ、固くなった自分の心が溶けて、柔らかくなっていくように感じた。早速手持ちの中で最もかわいらしい便箋を

松　井　様

10月3日、私たちはホールあそびをしはふでしていると中松井さんの家のベランダに入ってしまいました。(黄色いゴムボールです) ボールをとってもらおうと家にいきましたがるすだったようで、この手紙を置いていきます。

もうしわけありませんがもし、ボールがありましたら、4日にとりにいきますのでよろしくおねがいいたします。

本当にすみませんでした。
東沢悠宇
小高千香

出してきて、返事を書いた。思いがけない手紙をもらってうれしかったこと、明日も仕事で出かけているのでボールはガスメーターの中に入れておくこと、お天気のよい秋の日を元気いっぱい遊んで楽しいことをたくさん見つけて欲しい、と書いたメッセージを玄関のドアーに貼った。翌日帰宅すると、「ありがとうございました」と書かれたお礼の手紙が待っていた。

小学校三年生ぐらいであろうか。この二人の女の子の心は、見ず知らずの私という者に対して開かれている。人を信じてはいけないと教えなければならない事件も多い。ビニールの小さなボールなんかまた買えばいい、ましてボールが手元に戻ればそれでおしまい、そんな現代社会の風潮を超越し、限りなく人を信頼し、メッセージを送ってくれた二人の女の子。それにしても名前しか分からない人に手紙を書くことは大変なことだったろう。でも察するところ、ボールが飛び込んだその時から、どうやら二人の遊びはこの手紙かきに変わったようだ。状況の変化に応じて楽しみを見つけ、生活を充実させていくことができる、その柔軟性にも感心させられた。

久しぶりに子どもの心にふれ、私は忘れかけていた大切なことに気付かされ、癒された。

（元・幼稚園教諭）

黄遵憲がとらえた明治の子ども (1)

～『日本雑事詩』「幼稚園」、「正月の遊び」を手がかりにして～

首藤　美香子

《はじめに》

清国の初代駐日公使、何如璋に随い、明治十年末（一八七七）に来日した黄遵憲が、四年余りの短い滞在期間中に中村正直（敬宇）と深い親交を結んでいたことは、先行研究によってかなりの程度明らかにされている。詩人としても名高かった黄遵憲が在日中にしたためた文章の主要なものはほとんど、中村が刊行した『文学雑誌』に掲載されているなど、黄遵憲の方から中村に積極的に接近していった形跡が見られ、中村を通じて西欧の近代思想や新文物の摂取が図られたことは確からしい。(1)

ところで黄遵憲が来日したころの中村は、明治八年（一八七五）十一月に開校したばかりの東京女子師範学校の初代摂理として、また翌年十一月に設立された東京女子師範学校附属幼稚園の建議者として、日本の女子高等教育と幼児教育の基礎づくりに尽力していた。黄遵憲ら清国公使一行も、中村の招きに応じて女子師範を訪問

したことは、以下の文献から確認できる。黄遵憲自身の手になるものとしては、『日本雑事詩』58・59「女子師範学校」、60「幼稚園」が、中村のものとしては、『敬宇文集』巻四「送何公使序」に「亦嘗テ見レ涖下于余所ニ攝理スル之女校上。乃皇后所ニ創設スル也。」がある。

さらにまた、当時附属幼稚園の保姆見習いであった氏原鋹による次のような談話も貴重な証拠となろう。附属幼稚園は官立の幼稚園としては最初のものであったため、世人の注目の的となり、米国大統領グラント氏夫妻など外国人の参観も相次いだが、清国公使一行の訪問は特に印象深く記憶されていたようだ。

幼稚園というのが大変珍しかった時なので、参観人がかなり多うございました。田中不二磨夫人も丸髷で時々参観せられました。この参観人の内外国の公使もあったのですが、この中で一番鄭重な待遇をしたのは支那公使で、従者数名を連れ（一行十四名）参観せられました。開誘室を夫々通られて、最後に遊戯室に来られましたが、どういふわけか、幼児は立派な椅子に腰かけて居たのに、このお客様の公使には椅子をあげませんでしたので、立ったまゝで、幼児が遊戯してゐるのをヂット見て居られましたが、靴のつま先で、コツコツと拍子を合わせながら見て居られた様子の熱心なのが思ひ出されます。その後で、縦覧室で西洋料理（最上等の品で、精養軒からとりました）を饗応しました。其室内の装飾も立派に、小鳥の籠を下げたりしてゐたのでございます。来賓のお帰りになった後で、職員一同、見習いに来て居りました木村さんや私も、この中に入って御馳走になりました。何分西洋料理が始めてなので、よく食べ方も知りませんで、自分は平気で食べたのですが、先生方に大分冷汗をおかゝせしましたとのこと、後でよく作法を教へていたゞきました。(2)

中村と黄遵憲ら清国公使との浅からぬ関係が、この回顧録からも示唆されるであろう。また興味深いことに、最大限の敬意を表した幼稚園側の歓待ぶりに比して、幼児たちはお客様の公使にすすめるべき椅子を占領し、無邪気に幼稚園での主役ぶりを発揮していた点である。そ

の幼児たちの傍若無人な態度にも一行は不快の意を示すことなく、むしろ熱心に観覧していた様子であったらしい。明治を代表する開明的な知識人のひとりであった中村から貪欲に吸収し、自らの近代的思考を育んでいったとされる黄遵憲は、フレーベル主義にのっとった附属幼稚園から、何を感じとり、学びとったのだろうか。中国で最初の幼稚園が設立されたのは、一九〇三年武昌（日本人保姆　舟雪江氏が派遣された）においてであるが、黄遵憲ら清国公使一行のこの日の訪問は、中国幼児教育史においていかなる意味をもったであろうか。あるいはそれは、その後の中国の激動のなかで、何の痕跡を留めることもなく消え去る運命にあった、歴史の泡沫のひとつだったのかもしれない。

しかし、そう考えるにしては少し気がかりな点がある。『日本雑事詩』に収められた「幼稚園」の漢詩は、離日後書き改められているからだ。[3] この原本と定本を比較してみると、詩趣が相当異なることがわかる。一体なぜ書き改められたのだろうか。この改変については私は専門外なので、黄遵憲の思想遍歴や創作上の問題に立ち入って考察することはできない。したがって、なぜという問いを設けることは残念ながら避けざるを得ない。

そこで、この二つの詩および子どもの遊戯を題材としたもうひとつの詩134「正月の遊び」を、黄遵憲の内面あ

るいは中国幼児教育史の行末を写し出す鏡としてでなく、日本の明治初期の子どもの姿を写し出す鏡として、転用させていただきたい。黄遵憲のまなざしが切り取った子どもの姿を、他の来日外国人が残した子どもに関する記録との比較分析を通じて、また附属幼稚園における初期の教育の実態（唱歌・遊戯）、さらには西欧化の進行とともに様相を変化させる子どもの文化・風俗との関連から可能な限り明確にしてみたい。そして、黄遵憲の「幼稚園」に関するふたつの漢詩が示唆するところの意味を、日本近代の子どもの問題という観点から述べてみたい。

《原本「幼稚園」》

原本「幼稚園」は、次のような詩である。

都綳孩児赴甲科
垂髫囲坐抱書哦
閑来花面粉塗沫
愛挽師衣踏踏歌

誤読の謗りを免れないことは承知のうえで、私なりに鑑賞してみよう。

自分の足で歩くこともままならぬ程の、幼い子どもたちが大人の背におぶわれて、甲科（学ぶ場所の意に解釈）の門をくぐっている。先生を囲んでまあるく座り、黒髪をさらさらと揺らしながら、甲高い声でたどたどしく本を読む。自由時間には、顔を火照らしはあはあと息をはずませながら、一心に泥遊びに興じている。先生の着物の袂にまとわりつき、ぶらさがり、内から湧き上がる生の衝動を抑えきれぬかのように、全身を奮わせて歌う。

この詩は、大人の背にしがみつく子どもの頼りなさや小ささ、滑稽なくらい大真面目に学ぶ姿、駆け回り跳びはねながら上げる陽気な笑い声、甘酸っぱい汗のにおいなどが、臨場感をもって生き生きと伝わってくるようだ。黄遵憲の筆は、子どもの群れが発する熱のざわめき

だけでなく、個に肉迫したアングルで、子ども特有の言動の輪郭をもあざやかに際立たせているように思う。また「孩児」「垂髫」「花面」と子どもの存在にピタリと焦点があてられているのがわかる。黄遵憲の子どもの動きを前面に描き出した創作態度は、現存している漢文による参観記、例えば第一高等学校教授　鹽谷時敏（記載の目的は不明）が幼稚園の物理的環境や制度的側面、教育的意義を記しているのに比べてもあきらかである。(4)

ところで黄遵憲が解説に付している幼稚園の保育内容は、明治十年に制定された幼稚園規則に一致しており、物品科・美麗科・知識科およびこの「三科包有スル所ノ子目」である、フレーベルの二十遊嬉（恩物）のことである。創設当時の保育内容で、特に注目すべきは唱歌であった。よって黄遵憲が「愛挽師衣踏踏歌」と詠んだ部分は、後に子どもの世界を席捲することとなる唱歌・遊戯の台頭を記録したものといえる。

幼児向け唱歌は旧来からあったのではなく、豊田芙雄ら創設当時の保姆が外国の歌詞を翻訳し、また自ら創作

▲図１　「幼稚園に於ける鳩巣（家鳩）の遊戯の図」（明治10年頃の実写図）
『年表・幼稚園百年史』（お茶の水女子大附属幼稚園発行）より

して、幼稚園に定着させたものである。当初は曲は雅楽調であり、式部寮の伶人に委嘱して作曲された。お茶の水女子大学図書館入口に掲載されている「幼稚園に於ける鳩巣（家鳩）の遊戯の図」は、明治十年ころの実写図（図1）とされる。黄遵憲も同様の光景を見たことだろう。少し横道にそれるが、鳩巣（家鳩）の唱歌・遊戯について簡単に紹介したい。

《唱歌・遊戯》

この家鳩の唱歌は、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』に所収されている「鴿舎の歌」で、桑田親五訳『幼稚園　下巻』（明治十一年）のなかで以下のように訳され、遊び方が紹介された。

鴿舎あけて鴿を放そ（稚児等円形中を出でて行く）
鴿は何処へ行た田畝に遊ぶ草原に遊ぶ（円形を出てたる稚児の遊ぶうちは繰り返しこの句をうたふなり）
早く帰れ鴿舎閉よ（声を高ふして三度この句を謡ひ円形に帰るべきを示すなり）
帰らぬから閉よソラ閉まった（この句を謡ふ時は帰って来るとも円形に入るは能はざるなり）(5)

この訳では直訳で歌うことができない。これをさらに豊田芙雄が訳したものが次のもので、雅楽調の曲によって広く歌われたという。

いへばとの　すのとひらきて
はなちやる　ゆくゑやいづこ
やまにのに　しばふのはらに
あそぶらん　あそびてあらば
かへらなん　とくかへらなん
かへらずば　すのととぢてん
すのととぢてん(6)

倉橋惣三（大正六年より二五年間にわたり附属幼稚園の主事をつとめた）は、このようにして「五六歳の幼児

がたがひに手をつなぎ合って輪を作り、唱歌をうたふ有様は、当時にとって新しくもまた珍しい光景で、さぞ人々の心を惹いたことであろう。」「幼児相集まって唱歌をうたふ、この事がすでに従来の教育のどこにも見いだせなかった新しいことではないか。そして殊に外に於て恩物本位の保育中にこの唱歌の織り込まれてゐることは、今より一層子供の声のあどけなさ、音調の和やかさを偲ぶに余りあることであったと思ふ。」と、唱歌・遊戯の漸新性について述懐している。(7)

附属幼稚園における唱歌・遊戯の導入と相前後して、明治十二年には文部省に音楽取調掛が設置され、洋楽が取り入れられ、明治十四年には、邦楽に洋楽が加味された文部省編の「小学唱歌集」が出版され、そのなかの「蝶蝶」「大和撫子」などは、幼稚園においてもその後長く歌われた。また附属幼稚園が主となり音楽取調掛の協力のもとで、一層幼児向きの唱歌が作られ、明治十六年、これがまとめられた。なお、それは明治二十年に「幼稚園唱歌集」として刊行されるに至る。

したがって、黄遵憲が来日していた明治十年から十五年は、子どもの世界がある過渡期を迎えた時期でもあった。再び、倉橋の言を借りよう。

然るに前述のごとく明治十四年ごろから唱歌が発達して来ると共に、これに伴ふ唱歌遊戯、洋風遊戯が隆盛になって来て、一般の子供の遊びが、ガラリと変わって行った。即ち伝統の遊戯は、そのありのままで、口伝へに次から次へと伝わって来たのであって、新作されるものでは無い。一方小学唱歌集が出版されて、これに伴う遊戯が作られてくると共に、今迄巷に伝へられて居た童謡遊戯は、すげなく追いやられ、忘れられてしまったという有様になった。幼稚園の遊戯唱歌が、非常な勢いで子供達の世界へ進出して行って忽ち子供の世界を風靡してしまったのである。(8)

以上のことから、黄遵憲の「幼稚園」の詩（原本）が、幼稚園という場が子どもの世界に発した新たな力の一端を、奇しくも感受していたことが理解できよう。

—つづく—

（お茶の水女子大学大学院）

《註》

(1) NORIKO KAMACHI : REFORM IN CHINA Huang Tsun-hsien and the Japanese Model,Counsil on East Asian Studies,Harvard Univ.1981 pp. 94 100,121 —122,262—263

佐藤保「黄遵憲と日本」『近代文学における中国と日本』汲古書院　一九八六　P. 55—76

佐藤保「〝客家〟の女性　黄遵憲の詩を中心に」お茶の水女子大学文化センター年報第一号　一九八七　P. 13—23

(2) 倉橋惣三　新庄よしこ『日本幼稚園史』フレーベル館　一九五六　P. 63—64

(3) 黄遵憲の原本執筆の時期は、来日前半の明治十一年秋から十二年春にかけてとみなされており、また定本はその八年後、ロンドン総領事をつとめるかたわら執筆されたとみなされている。実藤恵秀　豊田穣訳『日本雑事詩』平凡社東洋文庫111　一九五八　解説（実藤恵秀）P. 309—322

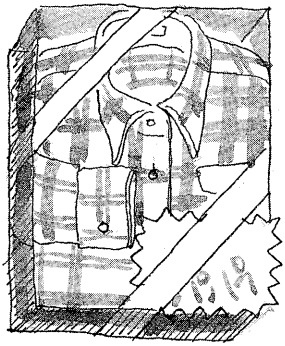
(4) 倉橋惣三　前掲書「幼稚園参観記及び追憶」P. 79—80

(5) 桑田親五訳『幼稚園』は、岡田正章監修『明治保育文献集第一巻』ひかりのくに　に所収。「鴿舎の歌」P. 338

(6) 倉橋惣三　前掲書　P. 246

(7) 倉橋惣三　前掲書　P. 232

(8) 倉橋惣三　前掲書　P. 310



ある日の育児日記から (48)

佐藤　和代

有は二歳半になりました。このごろは、圭の友だちが遊びにくると、ままごとの仲間入り。それも今までは〝赤ちゃん〟か〝犬・猫〟役に甘んじていたのに、最近〝お父さん〟に昇格。「お父さーん」と呼ばれて「おー、ここだよ！」なんて答えているのを聞くと、私は隣の部屋でひっくり返って笑っていたりします。

圭と有の二人で、押し入れにはいってごっこ遊びをすることもふえました。台所で家事をするふりをしながら聞き耳をたてるのが、私の楽しみ。お姫さまになったり、看護婦さんになったり、アニメのヒーロー・ヒロインになったり。聞いている私にも、小さい頃押し入れにこもって空想にふけった、あの幸せな気分がもどってきます。「押し入れから飛び降りないのよ！」なんてマジメな声で言いつつ、顔はしっかりゆるんでいたりしてね。

かくして、ごっこ遊びには甘い私。以前着ていたパーティドレスは縫い直して圭のお姫さまドレスに。レースの手袋やショールも譲り、ヒーロー変身グッズも買いました。

子どもたちは、いつまでこんなごっこ遊びを聞かせてくれるかな。そう思うと二歳と五歳のこの時期が、とてもいとおしく思えてしかたないのです。

圭、看護婦のこと「かんごく」と呼ぶのだけはヤメテ！

幼児の教育　第九十三巻（平成六年）総目録

☆一号

〈巻頭言〉子供に支えられる大人　宮澤　康人
保育は身体的行為でありながら知的行為である　津守　真
「遊び」を身体に刻み込む教育　清水　諭
私の子ども時代(1)　生い立ちの記　牛島　義友
ペスタロッチーと幼児教育　鈴木由美子
食と文化　素材・嗜好・料理　島田　淳子
倉橋惣三「保育法」余聞(3)　土屋　とく
Eさんへ　青木　章子
ある日の育児日記から(37)　佐藤　和代
堀合先生に学ぶ(10)　上垣内伸子

☆二号

子供讃歌
身体の惰性をひき止める力　津守　真
「子どもの権利条約」を巡って(4)　境澤　和男
うるわしい子育て日記(上)　村田　修子
婦人宣教師、ミセス・ブラインの「おばあちゃんの手紙」(12)　小林　恵子
手をつなぐ　田中三保子
子どもたちへのまなざし(6)　松井　とし
かるーい読み物のページ　「猫の見た子供たち」　K・M・H
ある日の育児日記から(38)　佐藤　和代
堀合先生に学ぶ(11)　立川多恵子

☆三号

〈巻頭言〉巣立つ人達へ　黒田　成子
保育の基本がここにはある　津守　真
「子どもの権利条約」を巡って(5)　森田　明
堀合先生に学ぶ(12)　立川多恵子
幼稚園にいる生き物について　高田　和宜
子どもと自然のかかわりの中で思わされたこと　松波　淑子
うるわしい子育て日記(下)　村田　修子
ある日の育児日記から(39)　佐藤　和代
傲慢　庄籠　道子

☆四号

〈巻頭言〉「保育雑誌」の行方　本田　和子
花祭りと山遊び　飯島　吉晴
子どもと外出する　津守　真

家庭科教育の男女共修をむかえて(1)　池戸　允子
新しい力　ふたたび子どもたちの中に
あって　長山　篤子
私の子ども時代(2)　多摩の自然と人間
関係の中で忘れ得ぬこと　森田　宗一
ある日の育児日記から(40)　佐藤　和代
子育てと夫婦の連携(1)　黒田　淑子
子どもたちへのまなざし(7)　松井　とし
子どもが一番受け止めてほしい気持
ちって？　岩上　節子

☆五号
〈巻頭言〉子どもに生活の満足を　秋山　和夫
人間を育てる　A子との十一年間　津守　真
あそびの研究(1)　遊びの本性は何か　高橋たまき
寝ている蛇　豊田　一秀
あまり役に立たない読み物のページ
「端午の節句」ってなーに？　K・M・H

保育の現場では「子どもの日」をどの
様に過ごしているか　編集部
私の子ども時代(3)　見詰めた時代　見
詰められた時代　赤羽美代子
Kくんと私の一年(上)　植田　敦子
ある日の育児日記から(41)　佐藤　和代
オランダ便り　向山　陽子

☆六号
子どもが夢みるささやかな幸せ　津守　真
子育てと夫婦の連携(2)　子ども達のS
OSのメッセージより　池田　秀子
特集〈暗い〉
星明かり、雪明かり　林　完次
インテリアデザインと「暗い」　長山　洋子
山陰は暗い？　小坂　恵子
暗さもつつみこむ園生活　藤野　敬子
「暗い」は大事　大多和　檀
「暗い」オランダ　向山　陽子
「暗い」感覚　田中　平八
家庭科教育の男女共修をむかえて(2)

男女共修がはじまった高校現場から
の報告　大塚須美子
ある日の育児日記から(42)　佐藤　和代
子どもたちと私たちの生活　福永　恭子

☆七号
子供讃歌
〈巻頭言〉卒園式または自分を解き放
つこと　間藤　侑
人間として文化的に生きる　津守　真
お母さんと一緒に考えよう、子育てを
小児科医からのメッセージ　鈴木　洋
「子育て」するクモ　新海　明
Sとのこと　伊集院理子
私の子供時代(4)　おじいちゃんのちい
さかったころ　松本十寸穂
Kくんと私の一年(下)　植田　敦子
子どもたちへのまなざし(8)　松井　とし
ある日の育児日記から(43)　佐藤　和代
海は友だち　吉澤　道子

☆八号
子供讃歌

いま私の生きている地点から　津守　真
特集〈緑蔭図書紹介〉
『臨床の知とは何か』　友定　啓子
『江戸城の宮廷政治』他　大口勇次郎
『天皇の逝く国で』　中村　弓子
『バルーン・タウンの殺人』
　中山まき子
『あやちゃんの贈物』　近藤伊津子
『いやだいやだのスピンキー』他
　寺田　京
『アニミズム時代』　上野　浩道
子育てと夫婦の連携(3)　自由業パパの
　敗北宣言　黒須　和清
ある日の育児日記から(44)　佐藤　和代
座談会　変わってきたのか　今どきの
　子ども達　現職幼稚園教諭

☆九号
子供讃歌
子どもと純粋に向き合う保育の場を
　津守　真
あそびの研究(2)　おもちゃと遊び文化
史のなかの江戸　太田　素子

秋の園芸作業　市原　菊恵
Nちゃんと Y先生(1)　田代　和美
読み物のページ　取り戻された子ども
　時代～李相琴・著『半分のふるさと』
　の場合～　K・M・H
今も迷いながら　高橋　和仁
子どもたちへのまなざし(9)　松井　とし
ある日の育児日記から(45)　佐藤　和代
児童館に集う子ども達　高橋あき子

☆十号
信頼　津守　真
第47回日本保育学会報告
　Ⅰ幼児の笑い研究―これからいずこへ
　　友定　啓子
　Ⅱ猶龍―安藤劉太郎―関信三の軌跡
　　立浪　澄子
　Ⅲ障害をもつ子どもの問題　藤田博子
Nちゃんと Y先生(2)　田代　和美
家庭科教育の男女共修をむかえて(3)
　小学校での家庭科教育の実際
　　小池　郁子
Aくんとの一日　吉岡　晶子

ある日の育児日記から(46)　佐藤　和代
子育てにおける夫婦の連携(4)　夫婦の
　連携～その中身を問う　名取　明美

☆十一号
子供讃歌
シンガポールの旅　津守　真
ムクロジと子どもの遊び　国次　太郎
第47回日本保育学会報告
　Ⅳ発達を問い直す　無藤　隆
　Ⅴラウンドテーブル「早期教育は必
　要か」に出席して　小川　博久
　Ⅵ「家庭幼稚園」の試み～その意味
　　と考察～　東　喜代雄
Nちゃんと Y先生(3)　田代　和美
ある日の育児日記から(47)　佐藤　和代
私の子ども時代(5)　夢のような明治
　　中郷　誓子

☆十二号
〈巻頭言〉保育の「ビデオ観察」雑感
　佐伯　胖
家族　津守　真

あそびの研究(3)　韓国における十八世紀の子どもの遊び　朴　香俄
お正月さんがやってくる(1)　はる・みつ
幼児の言葉の記録　「聞いちゃった！」の実践より　国広　勝代
充実した時間　田中都慈子
家庭科教育の男女共修をむかえて(4)　中学生の保育体験学習に学ぶ　佐野　幸子
子どもたちへのまなざし(10)　松井　とし
黄遵憲がとらえた明治の子ども(1)　首藤美香子
ある日の育児日記から(48)　佐藤　和代
幼児の教育　第九十三巻　総目録

今年も最後の号を迎えました。十四年の長い年月、皆様に親しんでいただきましたカットの福田理恵先生が、この十二月号をもちまして、交代されることとなりました。毎号、繊細な夢のある絵で、私共の心をなごませて下さり、また、長きに渡り本誌を支えて下さり、心よりお礼申し上げます。これからも先生のますますのご活躍をお祈りいたします。

（K）

「幼児の教育」第93巻第五号（平成六年五月号）「オランダ便り」の記述の一部に、田口優美子氏の研究論文「『在外育児』の現状と課題」の文章より、無断で使用した箇所があり、著作権者である田口氏に大変ご迷惑をおかけいたしましたことを、心よりお詫び申し上げます。

向山　陽子

「幼児の教育」編集部

幼児の教育
第九十三巻　第十二号
（一九九四年十二月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成六年十二月一日
編集兼発行人　本田和子
発行所　日本幼稚園協会
〒112 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108 東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六〇四
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

手づくり保育シリーズ⑥

環境構成　赤ちゃんグッズ

- 0・1・2歳児のための保育環境づくりに役立つグッズ。
- 保母さんのアイデアが生きている、赤ちゃんにやさしいグッズ。
- 身近な素材を生かして、赤ちゃんの遊びや生活に彩りをそえ、発達をうながす工夫のあるグッズ。

八王子保育研究会・著

B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ① **歌ってだいすき** ―湯浅とんぼの遊びうた傑作選―

湯浅とんぼ・著　B5判・104頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ② **布で作ったアイデアおもちゃ**

鈴木美也子・著　B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ③ **思い出プレゼント**

島田明美・著　B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ④ **保育に生かす55の生活アイデア**

ほいく♡けんきゅうかい・著　B5判・96頁・定価2,200円(本体2,136円)

手づくり保育シリーズ⑤ **劇あそびがとびだした**

花輪　充・著　B5判・104頁・定価2,200円(本体2,136円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

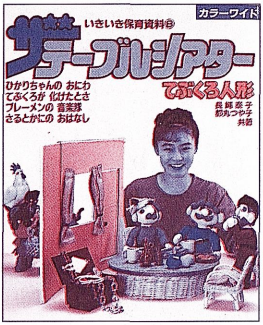
いきいき保育資料⑦ ザ・ペープサート

見せるだけのペープサートとは異なり、子どもと対話しながらストーリーを進めていく新しい形式の紙人形劇の演じ方と人形の作り方図説の解説書です。子どもでも演じることができるやさしい話の脚本もついていて、子どもの表現意欲を高めるのに役立つ保育資料です。

阿部　恵・著

B5変型判・80頁・定価2,500円(本体2,427円)

いきいき保育資料⑧ ザ・テーブルシアター



人形を持ってテーブルをかこめばそこが人形劇場に早変わり。人形はどこでも入手できるてぶくろが素材で、作り方もやさしくデザインされています。脚本は保育者と子どもとの対話が中心で、クイズ、歌、会話を盛り込んだストーリー展開ができるように作られていて、保育現場ですぐ活用できます。
「ひかりちゃんのおにわ」「てぶくろが化けたとさ」「ブレーメンの音楽隊」「さるとかにのおはなし」の４つの話。脚本と演じ方の解説書です。人形の作り方つきです。

長縄泰子・都丸つや子／共著

B5変型判・80頁・定価2,500円(本体2,427円)

いきいき保育資料①
ザ・エプロンシアター①
①「はらぺこ かいじゅう」
②「おふろに はいろう」
③「ねずみの すもう」

いきいき保育資料③
ザ・エプロンシアター②
①「まる さんかく しかくなあに?」
②「うさぎさん インフルエンザ」
③「大きな かぶ」

いきいき保育資料⑤
ザ・エプロンシアター③
①「みんな ねんね」
②「りんごの木」
③「せんたくしましょう」
④「どうぶつ いっぱい」

中谷真弓・著　B5変型判・80頁・各定価2,500円(本体2,427円)

いきいき保育資料②
ザ・パネルシアター①
①「三枚の おふだ」
②「ころころまてまて」
③「おばけの いつつごちゃん」

いきいき保育資料④
ザ・パネルシアター②
①「ももたろう」
②「おおきくなったらね」
③「ハッピーバースデー おつきさま」

いきいき保育資料⑥
ザ・パネルシアター③
①「ひつじかいと おおかみ」
②「たまごがころん あれあれ／」
③「あいうえおうじ」

阿部　恵・著　B5変型判・80頁・各定価2,500円(本体2,427円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館